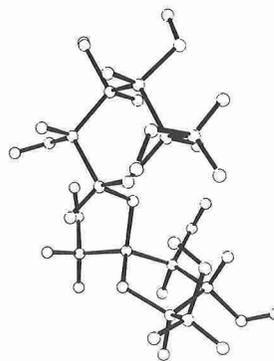
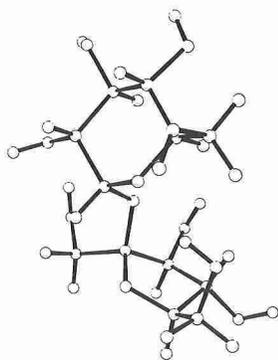
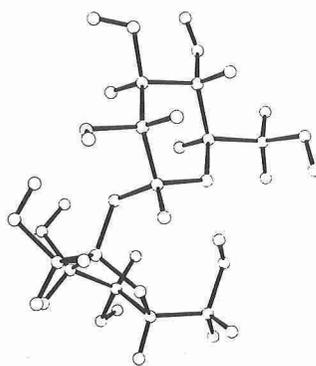
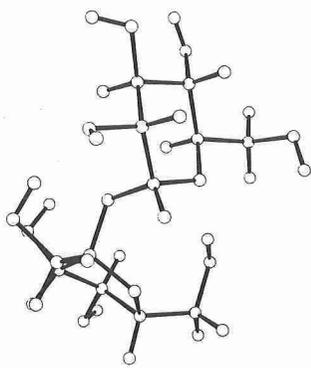


8 卷 2 号 昭和51年 6 月

廣 報

東京大学理学部

(題字は柴田雄次名誉教授)



目 次

ヒマラヤ植物調査のうら話
里帰り雑印象

My personal journey to
Japan

原 寛… 3

森永晴彦… 4

Jean Marc Jallon… 6

研究室めぐり(2)

ニュートン祭の思い出

<学部消息>

野上耀三… 8

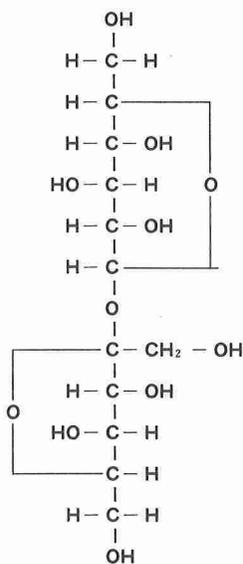
10~13

味と分子構造II. 砂糖
(表紙説明)

砂糖 (Sucrose) は6員環と5員環とが右図のように酸素原子で結合したもののだが、その結晶内の分子は表紙図に示すようになっている。有機化学の複雑な反応と論理とによって得られた結果がまさにピッタリとあっているのは感服する。図は上下共に立体鏡で見れば明らかなように(馴れると眼を細めて見るだけでも立体化する。)砂糖の分子を異なった方向から見たもので、連結の酸素原子のまわりに2個の環が互にぐらぐらするのを防ぐためにO-H...Oの水素結合で巧妙におさえている。図はG. M. Brown, H. A. Levy, [Acta Cryst. (B) 29 790 (1973)] の中性子線解析の結果である。

砂糖がなぜ甘いのか。それと分子構造との関係はまだわからない。これよりずっと甘いサッカリンは、はるかに簡単な平面的な分子構造を持っている。最近では砂糖より3000倍も甘い純粋蛋白質もとりに出されているといわれ、甘さの科学は未開そのものである。

毎号の表紙の図は広報のために特にプロットしている。これは約一万種類の結晶についてどれでもまた誰でも比



較的に簡単に出来る。まづ TSS 端末からの検索によって sucrose の最新データのコードが SUCROS 04 であることを知る。次に

```
// XCALC  GLUCOS 04
@ PLOT
// XPLOT
@ Y -80.
@ Z 160.
@ T          20.
@ P          1
```

というような簡単な指令を与え、大型計算機センターのオープンプロッターのところへ紙を持って行って書かせればよい。コンピューターが自分の中に書き込んであるデータを用い、プログラムに従って自動的に全部仕事をしてくれる。上の指令で Y, Z は分子を回転させてちょうどよい方向に持って行く操作, T は縮尺を示す。これらのプログラムは TOOL-IR [山本毅雄, (大型計算機センター助教授), 根岸正光 (経済学部大学院)], XCALC [野上法正 (理学部大学院)], CHEMOGRAM の一部 [米田幸夫 (工学部教授)], ORTEP [C. K. Johnson (Oak Ridge National Laboratory)], XPLOT [飯高洋一 (薬学部教授) 坂牧俊夫 (物性研助手)] の各氏の合作になるものであり、最終的には XCALC, XPLOT によった。これらの方々に感謝の意を表す。また実際の仕事をやって頂いている大型計算機センターの三科淳君に謝意を表したい。読者の中で何かこういう物質の結晶中の分子構造が知りたいという方は一応小生に連絡の上どんどん自分で描いて頂きたい。

(島内武彦)

ヒマラヤ植物調査のうら話

原

寛（名誉教授）

1960年ヒマラヤに初めて植物専門の調査隊を送った頃には今ではとても考えられない多くの難しさがあった。しかし日本の植物を一層深く研究するためにはどうしても大陸の植物との関連を自ら資料を集めて研究することが大切であるという私の信念は変らなかつた。当時文部省は所要経費の半分位は寄附金が集まるような重要な（？）海外調査でなければ費用を補助しないという方針であつた。手続も厄介で募金にはみな総長の印が必要であつたし、事務の方々も色々と大変であつた。

第1次調査の時、多くの困難をのり越えて準備が完了し、ジープなどの大荷物も船で送り出しているよゝ隊員が出発という直前に一大事が起つた。インドからの至急電報でこの調査の最大の目的地であるシッキム入りの許可が取消されたというのである。私はここまで来ては後へ引けないので、自らインドで再交渉を試みる外はないと思い、すぐ茅総長を訪れ相談した。総長は「君がそう思うならできるだけやっごらんさい。」といわれた。これから、インド旅行の経験のない人には想像もつかないことがつきつきに起つた。

ニューデリーへ乗り込んで交渉を初めたが仲々大変だつた。許可がとり易いと思つてインドの学者と協力し同行する形をとつたのが、結果的には問題を一層複雑にした。交渉が長引きそうなので一応シッキムの外で調査を開始し許可がとれたらシッキムへ入る考で私はダーズリンへ行つて仕事を初めた。しかし毎晩夜中にはニューデリーと電話で交渉を続けなければならなかつた。当時インドの長距離電話は深夜でなければ聞えず、また申込んでから何時間後に通じるか分らなかつた。ホテルの主人が同情して、彼の住居の直通電話の傍に私のベッドをつくってくれた。許可がとれそうになるとインドの学者が今からでは準備が出来ないといひだしたり難行した。シッキム入りの予定日が迫つたので私は隊員を国境に向け先発させることを決心し、私一人残つて交渉を

つづけた。ようやくぎりぎりの日に何とか電話で話がまとまつた。私はジープをやとつて最短コースを通つて先廻りした。シンガリラ山脈の海拔3600mの山上から、夕方登つてくる隊員に向つて「許可がとれたぞ」と手を振つて叫んだ時の感激は今も忘れない。かくして2日後には全員そろつて待望のシッキム入りを果たした。

最大の難関は1967年第3次調査のブータン入りであつた。ブータン政府の内諾はとつてあつたが、その通路であるインド政府はこれを拒否する態度を変えなかつた。私はニューデリーへ行つたが、日本大使館はこれ以上交渉はできずとも無理と思うが御希望なら直接あたつてごらんさいというそつけない態度だつた。私は是非交渉をしたいといつて外務次官と面会の約束をとり、大使館から一事務官が同行した。次官に対し我々の研究の目的やこれまでの研究成果をまとめた出版物などを見せてブータンへ入ることの学術上の緊急性を強調し、我々の真意を詳しく説明して特例として許可してくれるよう懇請した。次官は私の説明には理解を示し、打ち解けた態度を見せたがこういつた。「実はブータンに入つてしまえば問題はないのですが、インドとの国境附近には軍事的に見られたくないことがあるので許可できないのです」と。彼はこれで話を終る積であつたかも知れないが、私は内心しめたと思ひ、すぐにこうつないだ。「我々の見たいのはブータン内の植物です。軍事的なことには全く関心がありませんから、おつしやる通りなら私共を目かくしした車で国境を通しブータンへ送りこんで下さい。そうすれば双方のいうことが両立するでしょう」。確かに手ごたえがあつて彼は少しして「あなたのいわれることはよく分りました。考慮してみますから改めてお会いしましょう」といつた。

次の会見の時、次官はにっこりしながら「あなたの御希望通りに取計うことにします。今日は大臣が議会に出席中ですから後でサインを貰つて正式許可

証は明日お渡しします。許可するからにはあなた方を目かくして通すような失礼なことはしません。条件ではありませんが、あなた方の報告書をインドの学者へ配りたいので20部(時価で15万円位になった)いただけないでしょうか」。彼は堅く握手してからわざわざ階下まで私を見送ってくれた。外交はやはりインドの方がうまいと感じた。同行した事務官は次官が階下まで送ってきたのは初めてだと交渉の成功をととても喜んでくれ、大使館には内緒ですがと上等のウイスキーの大瓶をくれた。こうして学術調査隊としては世界で初めてブータンへ歩を入れた。ブータンへ入ってからのブータン政府の歓迎は全く予想以上であった。政府は盛大な歓迎会を開いてくれ、国王に接見され私には特に純金のメダルが送られた。王妃にも夕食に招かれた。行く先々のキャン

プ場には伝令で連絡されていて歓迎のアーチが立てられていた。

今では政治状況が刻々と変わりつつある。親切にして下さった当時のブータン国王は1972年に急病で亡くなられた。シッキム国王、王妃とは特に親しく多くの便宜をあたえて下さったが、今はインド政府に追われ、シッキムはインドの一州として併合され独立の夢をたたれてしまった。とにかく現地の人々が常に好意をもって協力してくれたことが心強く、いくつもの綱渡りの難関突破に最後まで頑張れた。何回ものヒマラヤの旅で1回も事故がなかったことも幸運であった。今日までの調査研究の成功は、全く隊員を初め事務その他多くの関係の方々のご協力と御援助によるもので深く感謝している次第です。

里 帰 り 雑 印 象

森 永 晴 彦 (物理・客員研究員)

☆時間が速く立つ

物理教室の会食グループを辞してミュンヘンの工科大学に移ってからはや7年半、まったくいつの間に過ぎてしまったのだろう。バヴァリア州の大学では4年に一学期(一年二学期制) Forschungsfreisesemester というアメリカでいえばいわゆる Sabatical に相当する制度があってもう三年程前からそれをとる権利はあったのだが、やはり数年もいるといろいろと involve されて、それに子供の学校のきりなどもあり、はじめて昨年8月からこの4月の終りまでを9ヶ月間のこの“里帰り”につかえるようになった。受入れには、今回から学術振興会の外人招聘のなかに日本人でも長年外国にいてパーマネントになっている人をふくむ枠が出来たその第一号としていただき、一応東北大2ヶ月に東大に2ヶ月滞在することとなった。

私はこれまでも3回短期間だが帰国しているのだから、今回帰国したときにも別に感激も違和感もなかった。どうも年を取るに従い(というのが回数を重ね

るに従い)うつつた時の感激も違和感も減るように思われる。(これはまさに時差と反対で、時差の方は年と共に回復に時間がかかるようである。)むしろ不思議なほど新しい条件に早くなれてしまわしい。丁度、親しい友達が長い間わかれていてもつい昨日一緒であったかのように話しあえるように、自分がもといたところ — いまなら日本 — にもどってしまう。これはどうも、逆もまたしかりで去る12月に一ヶ月ミュンヘンに帰ったとき一ぺんでそこにもどってしまったて日本のことをすっかり忘れたのに自分ながらおどろいた。

特に(少々いや味になるが)東大の物理教室はこの転移を実感するのにいいセット・アップだ。あの暗くきたない旧館の二階の廊下は私が去った8年前と少しもかわっていない — 否むしろ私がその前に去った25年前からも、またはじめて学生としてふみこんだ30数年前からも変わっていない。だからまたここに出てきて見ると、なにか昔のつづきのようで、

7年の空白を忘れて、「いつのまにかたってしまうのだろう」と感ちがいくすのだ。もちろんこの連続をささえているものは、間3回の帰国やミュンヘンを訪ねてくれた友人のおかげもあるが。

こうした経験から推理できることは、ひとは2つ3つのちがう社会に連続を保って生きられるだろうということだ。私の場合には日本とドイツの外、スウェーデンに親しい友達が何人かいるのでその社会の移りかわりもある程度見ている。こうした断続した滞在の生活感情は勿論、ずっとその中にひたっている人のものとは違うだろう。勿論、他の社会を引き合いに出した考が当然飛び出してくるだろう。しかし、他の社会の基準は前にいったように案外 explicit には出てこないものだ。(少くも自分の方からはそう思っている。)

このように一応、よそにいたことは忘れてしまって生きている日本人は恐らく、他の日本人から見れば当人以上に違和感を感じさせるものかも知れない。この間ある会合で、東大系の人何人かいて、東大廃止論などが出たときに、私自身は東大人だと思っていたのに“では外から見てどう思いますか”といわれて、ハッと思ったことがある。

それでは私自身主観的には全くもとの社会に連続してもどった日本人なのだろうか。これは実のところ可成りのところまでそうのようである。言葉も、挙動も歩き方も、町に出た感じも全く日本人にかえった筈のように思えるのだが、もっと内的に明らかでない——いつも日本にいる日本人としての自分と、今のような不完全日本人である自分との間の違い——を、数ヶ月の里帰りの後に(帰国第一印象ではなく)体験したのである。それは「時間が速く立つ」ということだ。

☆良くなった日本

馬鹿らしい端的な一例としては、仙台について数日目に17年前私が修士論文の世話をして其後長くアメリカにいて高エネルギー物理学をやっていたY君が「先生どこかで一杯やりましょう」とやって来た。私の希望でSという17年前からあったかに料理屋にいったがこのカウンターからメニューもものまゝ全く17年の空白を忘れて杯をかわしたら、た

ちまち足をとられてしまった。17年という物理的、というよりむしろ生理的(不可逆、)時間が心理的にはほとんど0に収縮してしまったわけである。

こんなのは全く trivial な例であるが実は私にとって nontrivial な事がいくつかある。大体私は非常にセッカチな方で面白くないことがあるとどうしてもだまってあきらめられない。「森永さん、日本も少しづつは良くなりますよ」といってなだめられた事は何回もあるがまず少しづつを感じたこともなかったし、そんな少しづつの改善など少しも有難くなかった。こういう私にとって時間が速く経てくれることは大変ありがたい。少しづつの変化を知って教えていたゞいた方には、全く敬意を表さざるを得ないのである。

たしかに日本にしばらく生活して見て、日本はいろいろな面でみて平均的には良くなったようで、これは私の8年前の期待をはるかに上廻るように思える。平均的というのは勿論気にくない面もあるからだ。「良くなった」といってもどういう風にといわれれば、私は「衣食足って礼節を知る」という意味で衣食足って来たように思われるのである。私は昭和30年のはじめごろからほとんど毎年ぐらいヨーロッパ各地を歩いて「女の子の美しさはその国の良さを表わす」というようなことを考えていた。これは多分に体験論的な考えで早く甦った北歐が最初良くやがて戦後の復興と共にそれが南下し、一方、アメリカの頹廢がアメリカ人の女の子の美しさを損なっていったように思えた。これを日本にあてはめると日本もこのごろ美人が多くなってきたようで社会の安定、衣食の充足が反映してきたように思える。続いて日本にいる人もこれは感じるのだろうか？

も一つ時が解決してくれたように思われることは大学や学界の正常化である。大体私が以前もとても不愉快であったことはアカデミックな世界への政治の介入だったが、いつの間にかこの影響ははるかに少なくなったように思われる。勿論これらの政治家たちの没落はまだ一応それらの面子を保たれたまゝだし、制度的にも、それによっておこされた非可逆的頹廢もいたるところに傷あとを残したまゝでしかもそれらの影響によって日本の大学の能力は相当ひどくおちているように思われる。しかし感じとして

は病原菌はすでに弱力化しているように感じられる。如何に傷あとを直すかというのは可成りむずかしい問題なのと、も一つは、この弱体にまた別の病原菌がつくのを予防するという問題と、しかし、何とか希望をもって、セッカチでなく、見守りたいとおもっている。

☆豊かさの日本的固定

さて、前述の二つの大局的な印象、女の子がきれいになったことと政治の科学者が自滅の道を歩んでいるように見えることは喜ばしいことであるが、里帰りの印象は必ずしもいいものばかりではない。その中で最初の帰国の印象というよりむしろ9ヶ月滞在後の印象といったものを一、二ひろってみよう。

まず、一つ具体的なことで大変にくわいなくはないことがある。それは今回かなりあちこちの新設の大学や研究所の新しい食堂（あるいは新に改造された食堂）にいった。ところがほとんどすべてがセルフサービスで、これは前からそうであったのが、片づける方もセルフサービスで食事のあと自分で始末するようになってきている。この豚小屋で食べさせられたような感じはおそらくそれにまだ慣れていない方の罪であって、私だってだんだんに慣されていれば平気だっただろうし、また、いまからでもおそくはないのだろうが、気にくわいなのは、このシステムを弁護する論理である。一つに曰わく「人件費が高いから」と。しかしこれは理屈にならない。というのは、私がかんさつしておどろいたことは、どこでも選たくのある場合には皆さん、私の若かったころとくらべてはるかにゼイタクに食べているのにおどろくほどだからである。とくに筑波大学などで一方に

学生のアルバイトがなくてこまるといういながら、こういう非人間的機械化を行っているのは全く愚劣としか考えられない。

も一つの説はもっと意味深長である。ある人によれば、これは一つの間人関係の問題で研究者も自分の食べたものを自分で始末するというで食堂で働く人に対する思いやりなのだそうである。つまり日本の民主化の一つとしてこういうシステムが生まれたのだという。しかし、こんな考えこそ裏をかえせば職業の貴賤、もっと正確にいえば職業の貴賤を人間の貴賤に結びつける考の確認なのではないだろうか？ インドなどではそうでないようだが、いま近代化された西欧ではレストランで若い人達がテーブルを片付けるために働らくことは何のはじでもなく、やとう方はそれにより食卓を快適にするよう努力する。勿論それだけ高くなるが西洋の世界では豚になりたくないという文化のための支出を惜しまない。

もう一つ大変不愉快な事件は、私のドイツでの助手が一年滞日したとき、その子供達が日本の子供から石を投げられたことについて、いろいろの人と話したところ、そういう傾向があり、特に都内でひどいということである。そういえば新聞などを見ても日本人が物質的な国際化に反比例し人間的な国際化を怠っているように見えることが多い。こういう大人達の傾向は当然子供が正直に反応する。この問題についてはどこかで別に論じたいが、上記の民主主義のとんでもない解釈にしても、明らかに衣食足ったからもう礼節はどうでもいいダラクのあらわれのように思われる。無教養の繁栄が固定してきたように見えるのは里帰りの印象の一つである。

My personal journey to Japan

Jean Marc Jallon (物理・客員研究員)

When I heard about Japan for the first time, I was probably six or seven years old. A picture of my first geography book showed the Fuji mountain mirrored in a rice field, around which a few peasants were busy. A simple picture, but in the

early fifties audio-visual means of communication were still poor, and for a non-specialist French, the only interest in the remote Asia was concerned about news of our Indochinese defeats... In the sixth grade of the lycee, important economic countries were to be studied but the programme was so heavy that this very year Japan was passed over untouched. In the early sixties, I started to develop my curiosity about other nations and devoured a few monographs concerning Asian countries. An important part of my interest in Japan crystallized from an Alain Resnay's movie "Hiroshima, my love". The attempt to hold an intimate dialogue between a girl from Nevers and a survivor from the terrible bomb shocked my adolescence. At the same time French soldiers were killing Algerian patriots without trying to understand these different men and their own aspirations. I spent a few hours in the Paris Guimet Museum where, in spite of the confusion of that time, sobriety and harmony of Japanese objects seduced me.

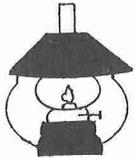
But my first true contact with Japan started in February 1967. Looking for a laboratory where I could obtain a master's degree in biochemistry, I met Prof. IWATSUBO in a dark room filled with optical machines. He offered me an opportunity to work with him and during the following seven years, in the CNRS lab he is leading, he initiated me to enzyme mechanistics, that he himself had learnt in the Biophysics laboratory of the school of Medicine, Osaka University. I was always very impressed by the great ingenuity of the techniques he was introducing to trap fugitive intermediates and the subtle structural changes involved in the functioning and regulation of enzymes. We have then been face to face for seven years with good as well as bad days. Our common work demanded a permanent dialogue between us. Through these biochemical conversations, I tried to understand our similarities as well as our differences and wondered about our cultural prejudices, the differences in our ways of thinking, without mentioning small irritations common in everyday life. At the same time I was eager for translations of contemporary Japanese novels and films arriving from Tokyo.

Once my doctorate had been cleared, I tried to plunge into the mystery of biology, mainly in a direction capable of mobilizing all my intellectual interests together. Then I took notice of Prof. HOTTA's work and the new approach he was setting up to study animal behaviour. I wrote to him asking if I could work with him. He kindly invited me to come to TODAI and since last October he has been continuously helping me with lessons and advice.

In the laboratory as well as outside, from the Noh theater to the popular sakura festival in the Ueno park, from the flies' room to the fish market and to Akihabara electronics fair, I have been opening my eyes as large as possible, and also my ears... But the Japanese language I try to learn offers much resistance. Moreover I have been shaped during thirty years by the ways and customs of France and my behaviour is dependent on this conditioning, which provokes anxieties, gaffs, misunderstandings, inhibitions, not only of my stomach, but also of others' as well, in spite of the thoughtful generosity of my hosts. It has been already seven months

since I arrived... My anchoring to the European world is becoming looser and looser. I am recreating here a new routine of life, a new affective environment; my inner landscape has become now more serene and thus more favorable to discover Japan.

I want to finish with a few remarks of more general interest. As most French and Japanese people will never be as lucky as I am to live such an exciting intellectual and human adventure, let me hope that our teaching in our respective countries does favour the deepest understanding between human beings. We must have everybody become conscious that besides his own culture and way of thinking, there are other cultures, other ways of thinking, very different indeed, difficult to penetrate, but the contributions of which to the universal heritage are of comparable richness. The history of scientific discoveries witnesses the complementary contributions from all countries and all races. Such a consciousness may help to build a world of peace and equally distributed prosperity.



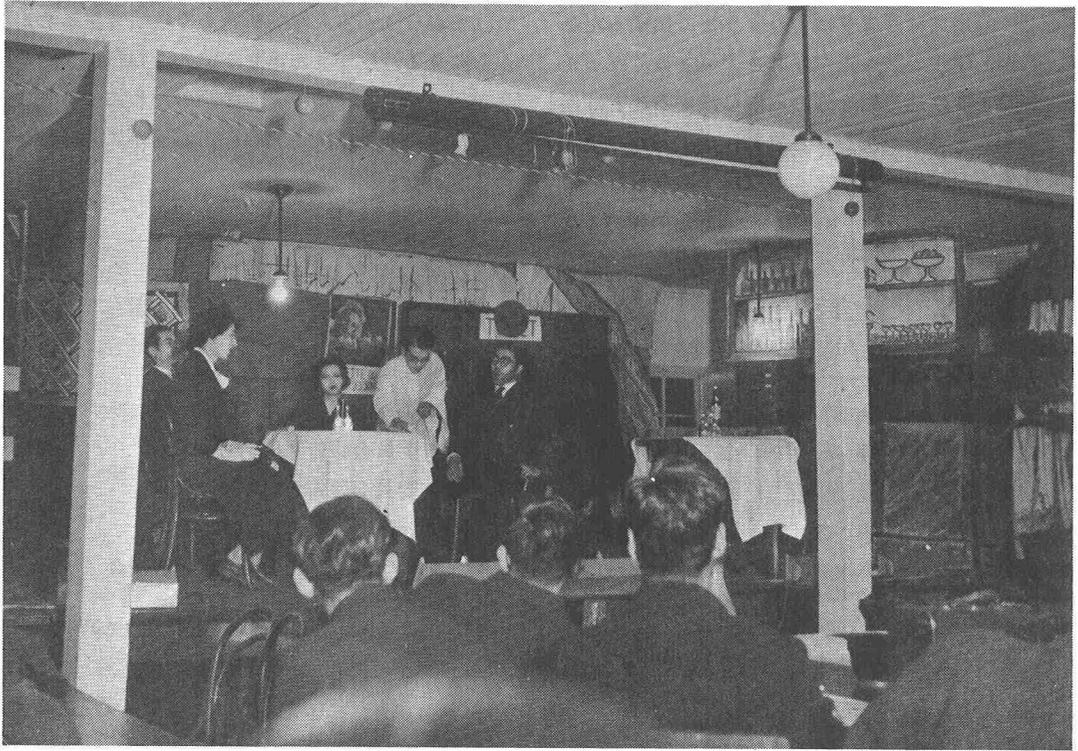
研究室めぐり(2)

ニュートン祭の思い出

野上 耀三(物理)

ニュートン祭について書くことを気軽に引き受けてしまってから、ふと思ひ当ったことは、私に期待されているのはこの物理学教室の伝統行事について、その歴史から始めて相当にまとまった紹介記事を書くことだったのではあるまいかと云う点だった。もしそうだったとすると編集委員の方には申しわけないことだが私は甚だ不適任で、かつてのニュートン祭で、田中館愛橘先生がニュートン祭の由来を話された時にも、次の出し物の準備に飛び廻っていてお話の内容も殆んど記憶に残っていない。しかしお祭りと言うものが集団の連帯感を再確認するための行事だとすれば、その意味での印象深い記憶はいくつか残っている。私が学生だった昭和21年から23年までのニュートン祭についての思い出は、空腹や闇市やカストリ雑誌の思い出のからまった今から見ればなつかしい無秩序と混乱に対する戦中派的な郷愁である。

ニュートン祭の会場は戦前は教室でやっていたそうだが「山上御殿」でやるようになったのは何時からの事だったろうか。会場設営は御殿のテーブルと椅子を使ったが、舞台を作るのには足りなくて物理学教室の講義室から机をリヤカーに乗せて相当数はこんだのを憶えている。会が終って10時頃に教室の裏口(当時は唯一の出入口だった)から机を運び込んでいると、泊り込んでいた用務員の「蓮見のおばさん」に遅くまでうるさいと叱られ、山内(恭彦)先生に今日中に復旧すると約束してあるので弁解すると「山内が何だい。この物理教室では私の方がずっと古いんだよ」と啖呵を切られた。食糧掛はやったことがなかったのでどうやって準備したかは知らないが、甘味の足りない薄いお汁粉は結構評判がよく、さつま芋は皆が主食として喰べあきており歓迎されなかった。ニュートン祭である以上、当然林檎が出ていた筈だが不思議に喰べた記憶はない。余



ニュートン祭の劇の舞台写真(出演者(左端より)
飯田修一氏, 服部学氏, 大村治子氏, 奥俊一氏, 小林喜幸氏)

興の本命は勿論スライドで、物理、数学、天文のそれぞれから出た文士が先生をからかう漫画を見せながら解説を公開する。出来栄を左右するのは第一にトピック、第二に解説、第三に漫画で、作る側の経験から云うと嫌なあとあじが残らず、うまくからかう題材をえらぶのは大いに苦心が必要だった。私のいまでも憶えている傑作は今井先生が全学運動会で駆けている最中に転ばれて、はいていたスリッパが両方ともぬげて飛び、それがうまく Karmán 渦になって並んでいる漫画だった。

スライドの他に諷刺的な skit をやるのも戦前からの伝統のようであるが、戦後のしばらくはそれよりもっと大がかりなものになった時期もある。どのクラス辺からかは知らないが、確か昭和22年卒のクラスが探偵劇をやり、それに刺激されてか我々のクラスでも下手な芝居をそれでも一生懸命にやった記憶がある。

特に我々のクラスには東大で初めての物理の女子

学生で今は順天堂大学教授の大村治子さん(当時は難波姓)がいて、しかも大いに舞台度胸があったので、大村さんを引張り出すために劇をやった傾向がある。物理学教室の芝居熱はしばらく続いて数年後のニュートン祭では学生ではなく嵯峨根研究室の大学院生や研究生が特別出演をした。題本は「ゼロの暁」を書いたローレンスの原爆による世界終末劇だったが、森永晴彦氏が熱心な提唱者で演出、監督まで買って出たこと、研究室で前夜大あわてで小道具を作ったこと、当日は筆の穂先きをばらして作った口ひげが途中落ちそうになり、つねにひげをなでてばかりいたことなどが懐かしい思い出になっている。ニュートン祭の思い出の中で一つ不思議なことは会が終わってから皆で解散会をして飲んだと云う記憶が一度もないことである。多分、当時は今よりも酒が手に入りにくかったのだろう。

さて、これからのニュートン祭はどうなっていくだろうか。今の学生諸君の多芸多才ぶりを見ると祭

りとしての余興は昔よりはずつとうまく出来るだろう。しかし学生の数も先生の数もずつと多くなった今、昔のような連帯感を強める催しにすることは遙かにむづかしくなつたろうと思われる。一つの手としては修士の院生諸君あたりが主催するのも好いの

ではなからうか。大学院に入って各研究室にわかれがちになる院生がまた集まって一つの行事をやる機会が得られるし、少くとも漫画のたねにする先生のゴシップのたねは院生諸君の方が遙かに多く握っているだろう。

<学部消息>

4月理学部会合日誌

4月9日(金)	会計委員会	1.30~3.30
" 12日(月)	理系委員会	3.30~5.00
" 14日(水)	教務委員会	2.30~3.30
" " "	主任会議	4.00~5.40
" 28日(水)	人事委員会	1.00~1.30
" " "	教授会	1.30~3.40

2. 人事移動等報告
3. 研究生の期間延長など承認
4. 人事委員会報告(稲本)
5. 会計委員会報告(田村)
6. 教務委員会報告(鈴木)

5月19日(水) 定例教授会

化学新館講堂

教授会メモ

4月28日(水) 定例教授会

理学部4号館 1320

1. 前回議事録の承認

1. 前回議事録の承認
2. 人事移動等報告
3. 教職免許教科に関する専門科目の単位認定について
4. 会計委員会報告(田村)
5. 教務委員会報告(鈴木)
6. 東大百年史について(江上)

人事異動

[講師以上]

教室	官職	氏名	発令年月日	異動内容
数学	教授	河田敬義	51. 4. 1	停年により退官
数学	教授	古屋茂	51. 4. 1	停年により退官
地質	教授	立見辰雄	51. 4. 1	停年により退官
物理	教授	吉川庄一	51. 3. 31	辞職
生化	助教授	酒井彦一	51. 4. 1	教育職(-)1等級(東京大学教授理学部)に昇任させる。
数学	助教授	伊原康隆	51. 4. 1	教育職(-)1等級(東京大学教授理学部)に昇任させる
数学	講師	飯高茂	51. 4. 1	教育職(-)2等級(東京大学助教授理学部)に昇任させる
植物	講師	大橋広好	51. 4. 1	教育職(-)2等級(東京大学助教授理学部附属植物園)に昇任させる
地物研	講師	佐藤哲也	51. 4. 1	教育職(-)2等級(東京大学助教授附属地球物理研究施設)に昇任させる

〔助手〕

教室	官職	氏名	発令年月日	異動内容
化学	助手	内藤周弼	51. 4. 21	復職

4月・5月海外渡航者

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	教授	西島和彦	ドイツ民主共和国 フランス	4.17~7.27	素粒子論の研究
地球	助教授	河野長	連合王国	4.12~1.31	古生代における地球磁場の強弱についての共同研究
化学	助教授	荒田洋治	アメリカ合衆国	4.23~5.8	第17回磁気共鳴国際会議出席及び研究連絡
生化	助手	村田紀夫	オランダ ドイツ連邦共和国 アメリカ合衆国	4.19~7.18	「光合成の系2」に関する国際研究集会及び第28回ブルックヘブンシンポジウム出席並び研究連絡
物理	助手	永嶺謙忠	カナダ	4.19~9.19	中間子による原子核・物性の研究
植物	教授	下郡山正己	アメリカ合衆国	5.9~5.15	「食糧科学」に関する打合せ会出席
物理	教授	山口嘉夫	ソビエト連邦共和国	5.16~5.29	巨大加速器研究グループ第1回会議出席
物理	教授	山崎敏光	カナダ	5.21~6.19	中間子による原子核・物性の研究
地物研	教授	福島直	ソビエト連邦共和国 スウェーデン スペイン アメリカ合衆国	5.22~6.22	沿地磁気子線観測計画国際会議及び I A G A 事務局運営会議及び同執行委員会出席
物理	助手	久保寺国晴	アメリカ合衆国 カナダ	5.22~7.5	中間子原子核物理国際会議出席及び中間子による原子核・物性の研究

外国人客員研究員

教室	国籍	氏名	現職	研究期間
物理	アメリカ合衆国	J. Robert Schrieffer	ペンシルヴァニア大学教授	51. 5. 8 ~ 51. 5. 31
化学	カナダ	R. Norman Jones	IUPAC 物理化学部部長	51. 4. 1 ~ 51. 6. 23
数学	アメリカ合衆国	Lawrence Markus	アメリカ合衆国 Warwick 大学教授	51. 4. 4 ~ 51. 6. 20

教室主任・施設の長

数学	藤田教授	物理学	佐々木教授	地球物理学	小嶋教授
情報科学	後藤 "	天文学	末元 "	化学	朽津 "

生物化学	野田教授	地質学	久城教授	植物園	下郡山教授
動物学	江上 "	鉱物学	竹内 "	地球施設	福島 "
植物学	飯野 "	地理学	吉川 "	高エネルギー	小柴 "
人類学	埴原 "	臨海	寺山 "	分光化学	島内 "

委員表抄

評議員	田丸, 下郡山, 西島	ガイダンス委員	上田
幹事	下郡山, 西島, 福島, 有馬	臨カリ委員	霜田
人事委員	古谷, 稲本, 宮沢(弘), 海野, 野田	カリキュラム検討委員	霜田
会計委員	田村, 江上, 宮沢(辰), 浅田, 飯島, 大木	山上会議所委員	寺山
教務委員	鈴木(秀次), 伊原, 霜田, 斉藤(正), 井上, 寺山, 定永	アルバイト委員	荒田
企画委員	植村, 宮沢(辰), 朽津, 飯島, 古谷, 小松	東大百年史委員	江上
学生委員(全学)	堀	東大百年事業委員	江上
" (理)	有馬	東大百年式典委員	江上
学寮委員	高橋(景)	アイソトープ委員(全学)	酒井
教職課程委員	竹内(均)	放射線管理委員	酒井, 斉藤(信), 平川, 代谷
教養連絡委員	上田	環境安全委員(全学)	稲本
図書行政委員	藤原	" (理)	稲本, 飯田, 宮沢(辰), 山上, 下郡山, 武田
広報委員(全学)	佐藤(哲)	入試制度検討委員	岩堀, 荒田
" (理)	木下, 田隅, 鈴木(秀夫)	学内規律専門委員	大木
外国人学生委員	斉藤(信)	改革室	和田(昭)
学生相談所委員	高倉	総長補佐	岩村
学生保健委員	堀田	院, 協議員	田丸, 末元, 野田
奨学委員	佐藤(久)	院, 学生委員(全学)	尾本
英文カレンダー委員	山本(祐)	院, 奨学委員	水野

ヘルツベルグ博士講演会とリセプション

物理及び化学教室は、1971年ノーベル化学賞受賞のカナダの物理化学者 G. Herzberg 博士(Herzberg Institute of Astrophysics, National Research Council of Canada)を迎えて、講演会を開催した。

講演題目 Experimental Tests of the

Quantum Theory of Molecular Hydrogen
日時・場所 1976年4月3日 理学部四号館 1220

水素分子のイオン化ポテンシャル, 解離エネルギー, 振動エネルギー, 回転定数などに関して、理論と実験の結果がたがいに改良されて、最終的には両



者が 10^{-6} から 10^{-4} の精度で一致するようになった。40年近い長い研究の歴史をクリアーな英語でていねいに説明された。化学会会期中、物理学会直前の時期であったにもかかわらず、学内外から多数の方が聴講された。講演後の質疑応答も大変楽しかったと博士は感想をのべておられた。

ついで同博士夫妻を囲んで理学部長主催のリセプションが、1320号室においてなごやかな雰囲気のもとに行なわれた。出席者は約40名、田丸学部長の挨拶に始まり最後には同博士の美声が披露され2時30分頃散会した。

(清水・吉野記)

理学部職員学生懇親会

5月17日(月)恒例のビアパーティが小石川の附属植物園でひらかれた。雨で中断されたのは残念であったが、雨やどりの時間をはさんで、その前後でビールの消費量は平年並のようであった。



***** 編集後記 *****

前号でおつたえしましたように、原寛名誉教授が先日秩父宮記念学術賞をおうけにられました。この機会にヒマラヤ旅行の思い出を書いて下さるよう編集子からお願いをいたしましたところ、快くお引受け下さって巻頭を飾ることができました。本号は偶然でしたが物理学教室の諸先生の玉稿がつらなりました。森永博士の「里帰り印象記」を山崎教授のお世話で、Jallon博士の「My personal journey to Japan」を堀田助教授の御尽力でそれぞれ頂くことができました。

「研究室めぐり」も物理学教室へうかがって野上教授から昔のニュートン祭の写真を無理にせがんで見せていただきました。天井から下っているのは林檎です。もとの写真ではよく見えていますが、印刷ではどうかと思い付けたくしておきます。なお、小石川植物園のニュートンの林檎の木の話もそのうち写真など見せていたゞく予定です。

表紙の「分子のすがた」は好評ですが、皆様立体的楽しんで頂けましたでしょうか。どうも能力に個人差があるようで、像が一致しないまゝ投げだしておいでの方もあってはならないかと思ひます。焦点距離9センチ位の虫眼鏡を左右の眼にあてると容易に像は一致して見事に浮き上がってきます。かく申す私もこの方法でのぞいて、美しさに一驚した者ですので、ぜひおためし下さるようおすすめてします。島内先生の御援助には感謝の言葉がありませんが、今しばらく私達を楽しませて下さるようお願いする次第です。

(K)

編集:

木下清一郎	(動物)	内線 3361
鈴木秀夫	(地理)	内線 3288
田隅三生	(生化)	内線 7372